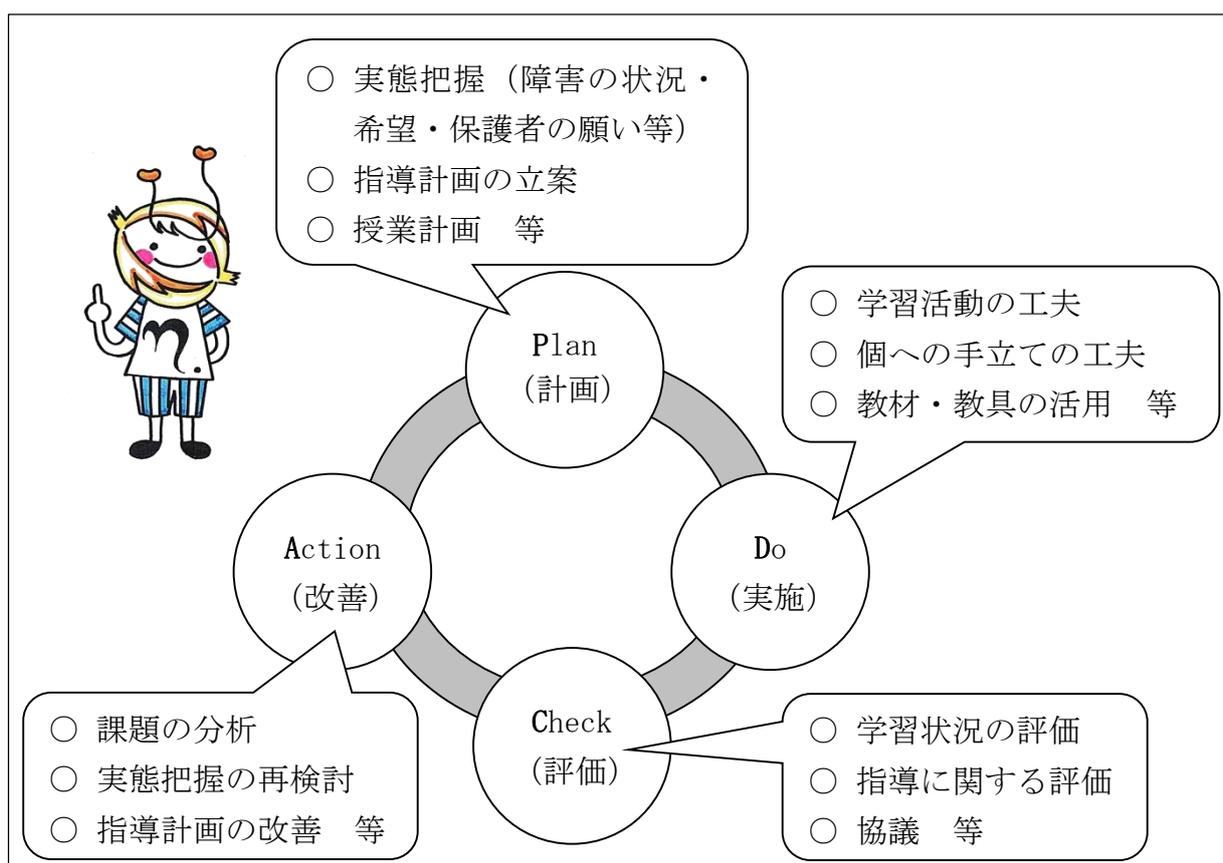


Ⅱ 特別支援学級等の授業づくり

この章では、特別支援学級における学習指導について説明をしていきます。一日の学校生活において、中心となるものは、もちろん学習指導、つまり毎回の授業になります。児童生徒は1年間に1,000時間あまりの授業を受けています。その授業を児童生徒にとって、わかりやすいものにしていくことは、彼らの将来の自立と社会参加の基盤を養ううえで大切なものであり、私たち教師の力量が問われます。

授業づくりは、「個別の指導計画」をもとにして、次のように進めていくことが基本となります。まず、児童生徒の実態を的確に把握し、指導計画を立案します(Plan)。次に、指導計画に従って、様々な手立てを講じながら学習活動を実施します(Do)。そして、児童生徒の学習状況を評価するとともに、教師の指導の妥当性についても評価します(Check)。その評価をもとに、課題を分析し授業の改善を図ります(Action)。この一連の流れをPDCAサイクルによる授業づくりといいます。〈下図参照〉



【PDCAサイクルによる授業づくり】

では、一人一人の教育的ニーズが異なる児童生徒に対し、どのように授業をつくって実践していけばよいのか、基本的な考え方や配慮事項についてまとめてみます。

【授業づくりの手順】

：授業づくりの8つの視点

① 児童生徒の実態把握を的確にする

※単元・題材に関する実態も的確に把握する。



② 指導の目標・ねらいを明確にする

※年間指導計画，学習指導要領等から指導目標（単元目標）やこの単元で何をねらうのかを明確にする。

実態把握，目標設定の工夫



③ 妥当性のある目標・ねらいを考える

※児童生徒のこれまでの経験や実態に合っているかを考える。



④ ニーズに合った内容を考える

※指導内容を工夫する。児童生徒の発達段階や障害の特性に合わせて考える。
☆「個別の指導計画」との関連を考慮する。

特性に応じた支援



⑤ 順序性のある指導計画を考える

※児童生徒の目標達成の度合いを予測し，それを順序立てて指導計画を立てる。
導入，展開，まとめを工夫する。

導入・展開・まとめの工夫，単元計画



⑥ グループ編成は適切か考える
〈全体，グループ，個別〉

※集団化と個別化の工夫をする。発達段階や目標との関連で工夫する。
ティーム・ティーチングの良さを活かす。
☆複数の教員で指導に当たる場合



⑦ 学習環境や場の設定は適切かどうかを考える

※意欲を高めるような場の設定を行う。板書における工夫も考えたい。

場の工夫



⑧ 授業の効果を高める教材・教具の工夫をする

※目標を達成できるように，発達段階に合った効果的な教材・教具の工夫をする。

教材・教具の工夫



⑨ 教員の役割分担を明確にする

※授業づくりの段階で共通理解を図り，役割分担を明確にする。

ティーム・ティーチング



⑩ 児童生徒の反応を予想する

※実態の分析から，児童生徒の動きや反応の様子を予想し，指示や発問の内容，賞賛の仕方などを工夫する。

発問・応答・賞賛などの言葉かけの工夫



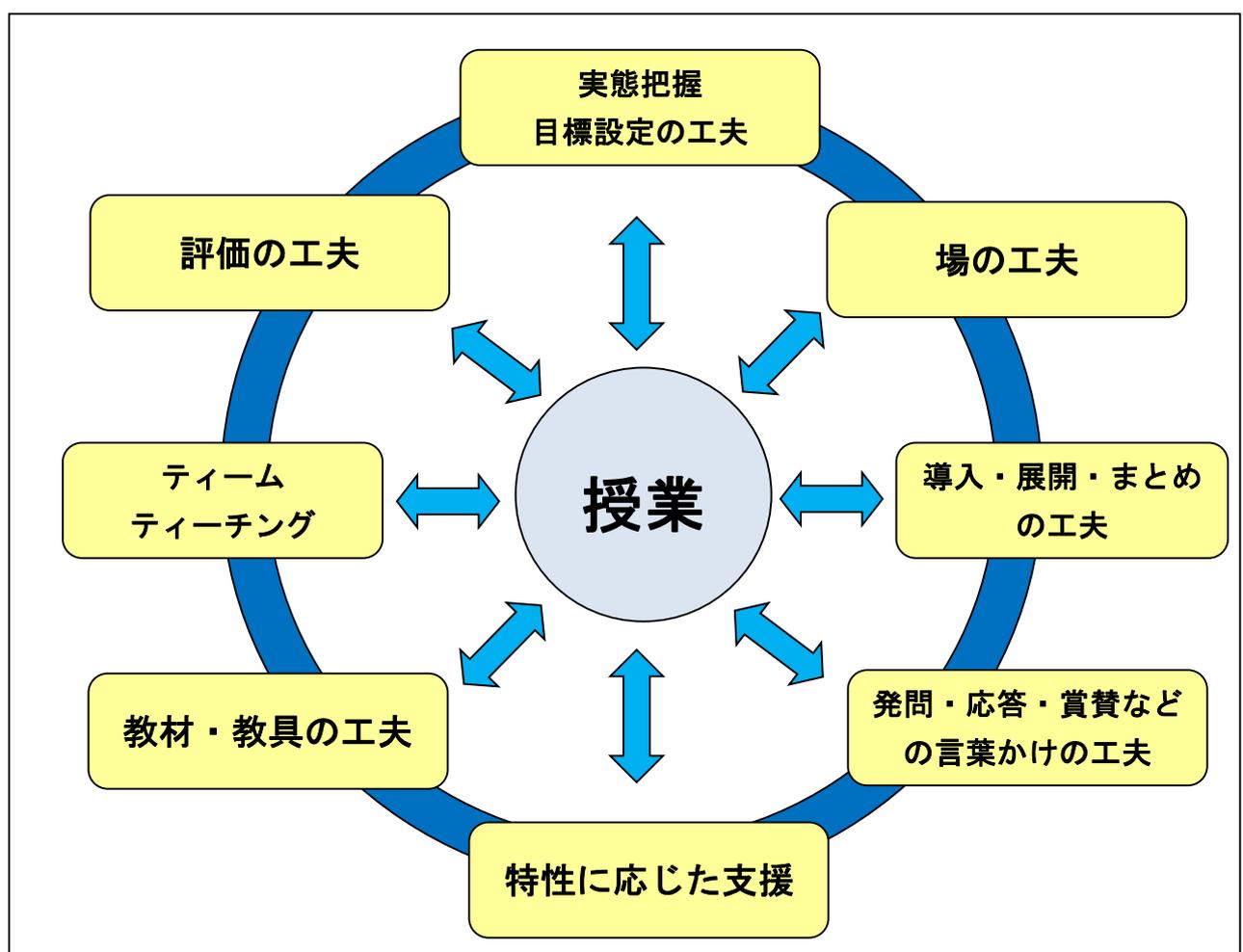
⑪ 評価方法について明確にする

※児童生徒の反応や変容を客観的に見取り評価するとともに教師自身の指導についても評価し，次時の授業改善につなげる。

評価の工夫

児童生徒にとってわかりやすく，達成感を得られ，さらに意欲と自信を高められるような授業を実践していくためには，多くの配慮すべき事項があります。「何をどう計画，準備していけばいいのかわからない」という声もよく聞かれるところですが，ここでは，多くの配慮点の中から，授業づくりに必要な8つの視点を示し，焦点化することで，授業づくりをより効果的に進めていけるようにしました。（下図参照）

この8つの視点については，特に順序性があるわけではなく，それぞれが密接に関連しています。ここに示した8つの視点について，目の前の児童生徒を想定しながら，授業を計画し，準備していくことで，よりよい授業が実践されることと思います。この後，8つの視点について1つずつ簡単に解説をしていきます。



【授業づくり8つの視点】

1 実態把握, 目標設定の工夫

児童生徒の障害の状態は、一人一人異なっていますので、必然的に指導内容や指導方法も一人一人に合わせていくことになります。そのため、的確な実態把握が求められます。まずは、様々な情報を収集し、その子の全体像を把握しましょう。

実態把握 ⇨ 学級経営編 6 教育課程の編成

1 実態把握の考え方の基本

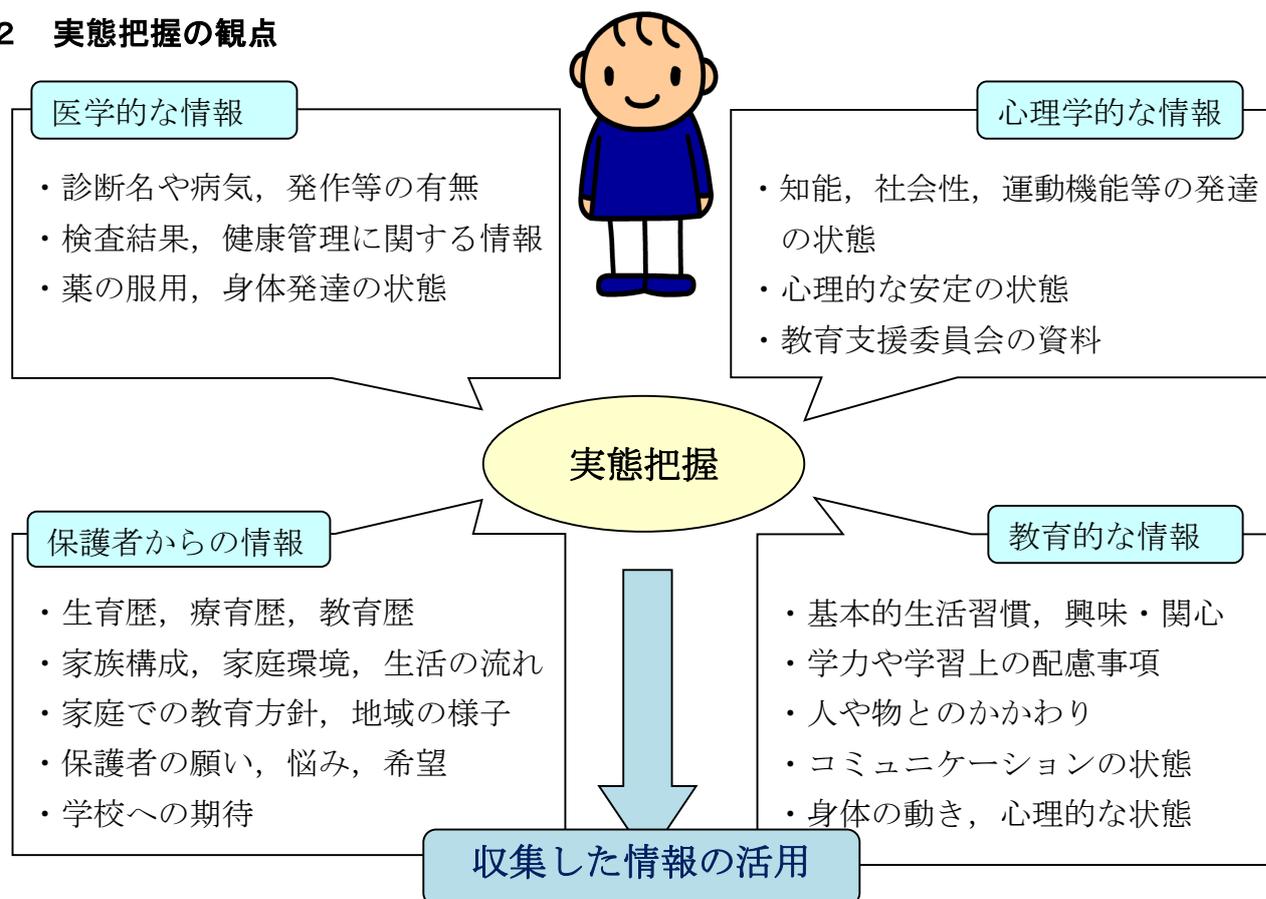
一人の子どもとして考えること

障害名にとらわれず、まずは目の前の「子ども」本人を受け入れて、その姿を見いだすことが大切です。「ADHDの指導」ではなく、「A君の指導、B君の指導は」と個々の実態把握が基本です。

「できること」を知ること

障害を背景要因, 環境要因からも肯定的に理解することが大切です。「できないこと」だけでなく、「できること」「できそうなこと」を知ることが実態把握の基本です。

2 実態把握の観点



きちんと整理し、教師が指導の中で位置付けて活用していくことが重要

3 実態把握の留意点

- 指導に役立つ実態把握を目指しましょう
→ 実態把握を指導に生かします
- 「できるところ」「もう少しでできそうなところ」の発見を心がけましょう
→ 「できないところ」だけを見ません
- 柔軟な目で児童生徒をみましょう
→ 思い込みによる実態把握にならないようにします
- 常に児童生徒と関わりながら観察しましょう
→ 児童生徒の様子は場面によって変化します
- 現象面のみに目を奪われず、行動の背景理解に努めましょう
→ 表れる行動は氷山の一角です
- 検査、調査、観察は実態把握のための資料の一つと心得ましょう
→ 例えば検査結果のみにとらわれるのではなく、全体像、臨床像を見失わないようにします
- 複数の教師の目からの情報を実態把握に反映させましょう
→ ひとりよがりの、自分だけの見方にならないようにします
- 一時期の検査、調査、観察で実態把握を終わらせないようにしましょう
→ 子どもの姿は日を追うごとに変化し、日々成長します

4 各単元（題材）に関する丁寧な実態把握を

児童生徒の実態について、上記のような情報を収集し整理して、全体像を把握しながら、個別の指導計画や年間指導計画を並行して作成していきます。そして、各単元や題材の計画を立案し、毎回の授業へとつなげていきます。

ここで、考えておかなければならないことは、先ほどの全体的な児童生徒の実態のみでは、これから、実施しようとしている単元（題材）、あるいは、本時の授業に関する児童生徒の実態について、十分に把握しきれていないことが多いということです。

そこで、これから行う授業に関する実態を丁寧に把握しておけば、的確な目標が設定でき、指導の手立てを講じることができます。

※例えば、算数・数学等で、「買い物学習」の単元を実施する場合…

- 買い物の経験はどの程度あり、どのように行っているのか
- 金銭（紙幣、硬貨、おつり、価値・・・）に関する理解はどの程度なのか
- 必要な額を出せるのか、おつりをもらうことの意識はもっているのか
- 計算力はどの程度なのか
- 決められた金額内で品物を選べるのか・・・

など必要と思われることが多く出てきます。今回の「買い物学習」におけるねらいは何かを整理した上で、そのねらいに関するより詳細な実態を把握しておくことが的確な目標設定につながります。次に示すような学習到達度をみるチェックシートのようなものを活用することも有効です。

学習到達度チェックシート＜金銭＞				
主なねらい	具体的な指導目標	A	B	C
1 お金の種類を弁別することができる	① 1円、5円、10円、50円、100円、500円をそれぞれの金種に分けることができる			
	② 1,000円、2,000円、5,000円、10,000円をそれぞれの金種に分けることができる			
2 硬貨、紙幣の名称を言うことができる	① 1円、5円、10円、50円、100円、500円の名称を言うことができる			
	② 1,000円、2,000円、5,000円、10,000円の名称を言うことができる			
3 単一硬貨や紙幣を10枚まで数えることができる	① 1円硬貨10枚までの金額を数えることができる			
	② 10円硬貨10枚までの金額を数えることができる			
	③ 100円硬貨10枚までの金額を数えることができる			
	④ 1,000円紙幣10枚までの金額を数えることができる			
4 各硬貨間、及び紙幣間の等価交換が分かる	① 10円と1円10枚、100円と10円10枚、1,000円と100円10枚の等価関係が分かる			
	② 5円と1円5枚、50円と10円5枚、500円と100円5枚の等価関係が分かる			
	③ 10円と5円2枚、100円と50円2枚、1,000円と500円2枚の等価関係が分かる			
	④ 5,000円と1,000円5枚、10,000円と1,000円10枚の等価関係が分かる			
5 品物の値段より、大きなお金を支払って買い物することができる	① 100円以下の品物に100円を支払うことができる			
	② 500円以下の品物に500円を支払うことができる			
	③ 1,000円以下の品物に1,000円を支払うことができる			
	④ 1,000円より高い品物に対して、適当な枚数の紙幣や硬貨を支払うことができる			
6 品物の値段に見合ったお金（硬貨や紙幣を組み合わせる）を支払うことができる	① 2種類の硬貨を組み合わせることで支払うことができる（例：23円）			
	② 3種類の硬貨を組み合わせることで支払うことができる（例：512円）			
	③ 4種類以上の硬貨を組み合わせることで支払うことができる（例：876円）			
	④ 硬貨と紙幣を組み合わせることで支払うことができる（例：1,734円）			
7 割引や値引きされた金額が分かる	① 割引や値引きによって、品物が定価より安く買えることが分かる			
	② 100円の半額が50円であることが分かる			
	③ 100円の2割（20%）、3割（30%）引きの値段が分かる			
8 小遣い帳をつけることができる	① 買い物後、レシートを見て、自分がいくらお金を支払ったのかが分かる			
	② レシートのお釣りの表示金額と実際のお釣りの金額が同じであることが分かる			
	③ こづかい帳に買った品物、支払ったお金、お釣りをそれぞれ記入することができる			

※評価の観点
A：できる（分かる）と思われる
B：部分的な支援があればできる（分かる）と思われる
C：できない（分からない）と思われる

＜参考＞ H19 岩手県立総合教育センターより

同じように、「調理実習」を行うのであれば、調理に関する様々な知識や技能、関心や意欲等について、事前に十分把握して、適切な目標を設定し、学習を進めていくことが必要になります。

【各単元（題材）に関する実態把握のポイント】

☆授業で指導しようとしている内容に関して・・・

- つまづいている点、課題を発見する
- どこまで習得しているか把握する
- 強い力、得意なやり方を探る
- 課題に取り組んでいるときの様子を観察する
- つまづいている要因を推定する（未学習、誤学習の有無も）
- どこで支援を必要としているかを把握する
- 本人、家族のニーズを把握する



日頃の教育活動全般をとおして、意識的にこれから授業で扱う事柄に関する実態を把握していくことが大切です。「昨年はどうでした」という前担任からの情報や「家庭ではこうやっています」という保護者からの情報も貴重な資料となります。時には、単元に入る前に、時間を見つけて、また遊びの時間を活用して、試行的な学習を取り入れて、情報を得ておくことも有効です。

(例)

- 調理実習で包丁を使用する
 - ・ 図工や遊びの時間に粘土遊びを行い、おもちゃの包丁で切らせてみる
 - ・ 模型の野菜と包丁でごっこ遊びをしてみる など
- サッカーをする
 - ・ 休み時間に一緒にボール蹴りをしてみる
 - ・ 教室で簡単なPK合戦をしてみる など

各教科の学習（漢字、計算等）については、前ページに示したような系統的に整理された学習達成度をみるチェックリスト等が教育機関や文献等で紹介されていますので、それらを活用してもよいでしょう。各検査等で使用されている項目＜LDI-R（LD判断のための調査票）、SM 社会生活能力検査等＞も参考にとできると思います。



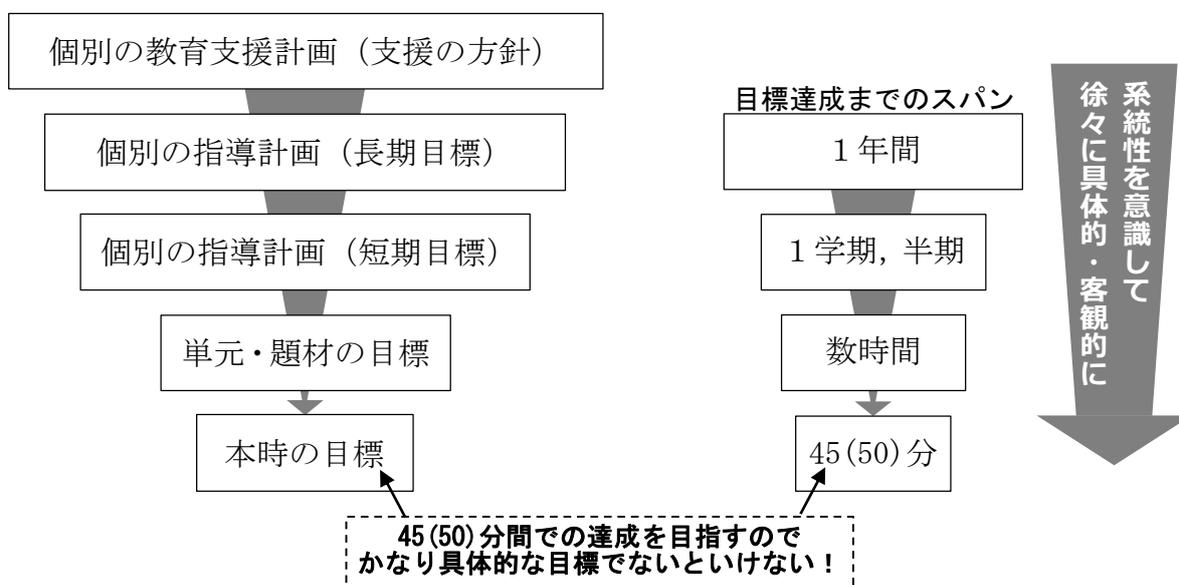
目標設定の工夫

単元（題材）目標や本時の目標については、その単元（題材）、その時間で達成可能な内容を具体的に表記することが重要です。具体的に表記することで、評価の際、目標の達成状況が明確になり、次の目標を的確に設定していくことができます。その積み重ねが、一人一人の教育的ニーズに応じたよりよい授業となります。

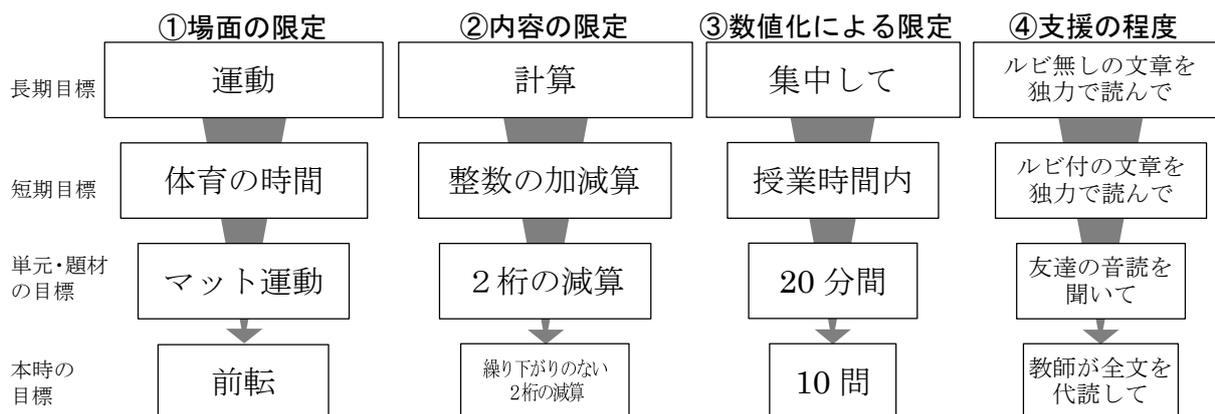
キーワードは、**系統的**、**具体的**、**客観的**です。

1 系統的な目標設定

授業における目標設定は、個別の教育支援計画に記された支援の方針や、個別の指導計画に記された目標との系統性（つながり）を意識することが大切です。



【系統的な目標設定の観点と例】



※支援の量を減らしたり、より間接的な支援にしたりする。

本時の目標については、基本的に、その時間に達成すべきものなので、次時も同じ目標にならないようにしたいものです。達成できないということは、目標が高すぎた、あるいは手立てを含め指導が適切でなかったということになります。



2 具体的、客観的な目標設定

目標をより具体的・客観的に記述することで、評価の観点が明確化し、誰が評価しても同じ評価ができるようになります。また、授業のねらいが焦点化され、児童生徒にとって分かりやすい授業にもつながります。具体的・客観的な目標設定には、以下の3つのポイントがあります。

(1) 観察及び評価（○×）可能な目標にします。

子供の内面で起きていることを目標にするのではなく、外からでも観察可能な行動を目標にします（行動の用語を使います）。

<p><例> 知ることができる（行動の用語ではない） ↓ 選ぶことができる，記述することができる，言うことができる・・・（行動の用語） 理解することができる（行動の用語ではない） ↓ 説明できる，例を挙げるることができる，言い換えることができる・・・（行動の用語） きちんと，しっかりと，丁寧に ～ できる ↓ 手順表のとおり，手本と同じように，印と印を合わせて・・・</p>
--

(2) 目標達成の条件を示します。（場面、教師の支援の内容等）

目標をより具体的にするために、条件に関する記述を添えます。これによって、評価の視点が明確化します。以下に条件の例を示します。

<p>○ 言語的な指示に関する条件 <例>・口頭でのルール説明で・・・・一つ一つ順番に言葉で伝えることで・・・</p>
<p>○ 視覚的に示された指示や教材に関する条件 <例>・教室前に掲示された学級のルールを読んで・・・・挿絵のある文章を読んで・・・</p>
<p>○ デモンストレーションに関する条件 <例>・教師が前転をするのを見て・・・・友達が発表するのを見て・・・</p>
<p>○ 道具や教材に関する条件 <例>・漢字にルビが振ってある文章を読んで・・・・4年生相当の文章題を・・・</p>
<p>○ 環境設定に関する条件 <例> ペアでの説明活動で・・・</p>
<p>○ 支援の仕方に関する条件 <例>・隣で教師が教科書を読むのを聞いて・・・・教師が注意を促す言葉かけをした時に・・・</p>

(3) 目標達成の基準を示します。(回数, 持続時間, 正答率等, 数値で示すとよい)

目標をより具体的にするために, 数値化できるものは数値化しながら, 目標の達成基準に関する記述を添えます。あわせて, 評価の方法に関する記述も添え, 評価の視点を明確化します。

○ 達成基準の例

- ・ 80%できる
- ・ 10問中7問できる
- ・ 5回できる
- ・ 算数の授業の間～できる
- ・ 10分間続けてできる
- ・ 2m運ぶことができる

○ 評価の方法の例

- ・ 業者テストで…
- ・ 子供が記述したワークシートで…
- ・ 教師自作のテストで…
- ・ 教師による観察で…
- ・ 子供の発言で…

<例> 本時の目標 「落ち着いて課題に取り組むことができる」

このような目標を立ててしまうことがよくありますね。

「落ち着いて」とは, どのような状態をいうのでしょうか?

「落ち着いて」の評価基準が曖昧なため, 教師の主観による評価が中心となったり, 教師間の評価がズレてしまったりするため, 適切な評価にならず次の目標設定も難しくなります。例えば……

- ・ 「20分間着席してプリントに取り組むことができる」
- ・ 「課題に10問取り組み, 7問正解することができる」
- ・ 「手順表を見て, 最後まで一人で作成することができる」……

このように目標設定を工夫すると確かな評価ができ, 次の目標設定に確実につながっていきます。



3 「本時の目標」設定のポイント

- 個別の教育支援計画, 個別の指導計画との系統性が意識されている。
- 観察及び評価 (○×) 可能な目標である。
- 条件が示されている。
- 基準が示されている。
- 学習を終えた段階で予測される成果や結果を書く。
- 子供の視点に立って設定する。主語は子供。 例) ~させる。 → ~できる。
- 肯定的な表現で書く。 例) ~離席しない。 → ~着席して取り組むことができる。
- 一つの目標について, 一つのことだけを述べるようにする。
- 子供の強い力を利用できている。

2 場の工夫

児童生徒の学習意欲を高め、目標に迫るためには、指導内容や一人一人の実態に応じた場の工夫が必要になります。人的・物的な環境を整えたり、活動の場所を変化させたりして、児童生徒が安心感をもち、集中して楽しく学習できる場を工夫してみましょう。

1 人的環境を整える

通常の学級のような大きな集団の中では、緊張感や不安感から自分をうまく表現できないことがあります。安心して学習に取り組むために、まずは教師との一対一の個別の学習から始め、徐々にペアやグループなどの小集団にしていくのもいいでしょう。

ただし、個々の発達段階の違いや児童生徒同士の相性もありますので、小集団の編成の際には配慮が必要です。



2 物的環境を整える

授業に意欲的に参加したり、目的とする活動に集中して取り組んだりすることができるようにするためにも、物的環境を整えることが必要です。例えば、算数・数学等では、「買い物学習」でお店を設定し、代金の計算をすることや、「数」の学習でボウリング場を設定し、倒したピンの数の計算をする活動など、楽しくできるように工夫しましょう。児童生徒の趣味や好きなキャラクター等を利用した場の設定も効果的です。

また、集中の妨げになる掲示物や備品等は、精選したり、カバーやカーテンで見えないようにしたりして、視覚的な刺激を減らしましょう。音(聴覚的な刺激)に対する配慮も必要です。



カーテンの活用

3 活動場所を変化させる

同じ教室内を、パーティションなどを利用しながらいくつかのスペースに分けることで、決まった活動は決まった場所で行えるよう、教室環境を設定するとよいでしょう。(場の構造化)

- (例)
- ・各自の机のスペース→学習
 - ・大きめのテーブルのスペース→作業（製作活動）
 - ・カーペットのスペース→ゲームや遊び、
 - ・ソファのスペース→読書 等

また、パソコン室や調理室等、特別教室の利用も効果的です。



パーティションの利用

3 導入・展開・まとめの工夫，単元計画

1時間の授業を計画する際に，導入→展開→まとめの一連の流れを工夫することは，活動への意欲づけや集中力の持続，学習目標の達成のために，重要なポイントになります。45分（50分）の時間を児童生徒の実態を踏まえながらどう組み立てていくか，順序立てて考えていきましょう。

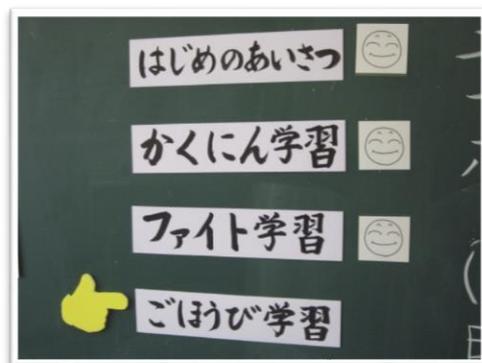
1 導入の工夫

授業の導入の時間には主に次の3つことをねらいます。



特別支援学級に在籍している児童生徒は，見通しがもてないために，不安になったり活動に取り組めなかったりする場合があります。授業の始まりには，視覚的な情報（板書や掲示）と聴覚的な情報（言葉での説明）で見通しをもたせることが必要です。

授業を小集団で行う場合には，一人一人に設定された目標を伝えましょう。児童生徒が自分の目標を理解して活動に取り組むことによって，それができたという達成感と自己有能感を感じることができるのです。



1時間の学習の流れの掲示



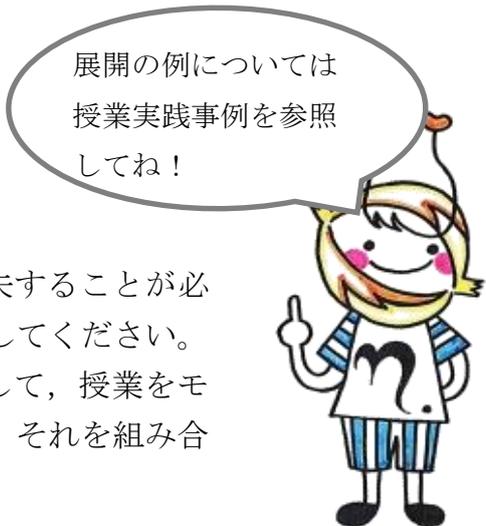
子供の意欲を高めることをねらった
読み聞かせ

また，日付・曜日・天気 の Q&A，歌，音読，読み聞かせなど，興味・関心の高い活動でウォーミング・アップをするのも，意欲を高めるのに有効です。それが，次の展開につながる活動であればさらに効果的です。

2 展開の工夫

展開の工夫は、授業づくりの視点の全てに大きく関連しています。個に応じた指導するためには、児童生徒一人一人の実態把握をもとに、授業の目標達成のための活動内容と方法（どんな場で、どんな教材・教具を活用して、どんな支援で）を工夫する必要があります。展開の例については、授業実践事例を参照してください。

児童生徒の実態から、集中できる時間にも配慮して、授業をモジュール化（ひとつの活動を10～15分程度として、それを組み合わせる）してみましょう。

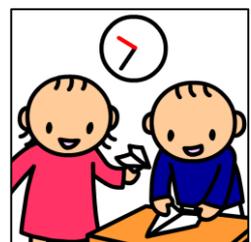
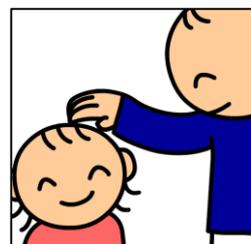
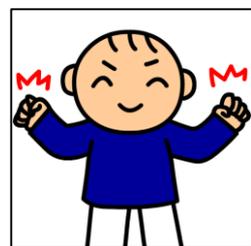


3 まとめの工夫

授業の終末であるまともは、それぞれの活動の振り返りをする時間です。児童生徒の学習の評価、教師の指導内容・方法の評価を行う場であり、授業づくりの8つの視点の「評価の工夫」と関連しています。児童生徒が導入で確かめた目標が、自分なりにどう達成できたかを表現（発表やワークシートに記入）できるようにしましょう。それに対して教師は児童生徒の活動に対してのフィードバックをし、大いに賞賛することが必要です。児童生徒同士も「友達の良かったところ」をお互いに表現し合うこともよいでしょう。それらによって、児童生徒は達成感を感じ、自信をもって次の授業にチャレンジしていくのです。

賞賛の言葉とともに、授業終わりの数分間を児童生徒の好きな活動（パソコン学習、トランポリン運動等）の時間にしたり、頑張ったご褒美のシール等を与えたりして、良い行動を強化するなどの工夫も必要に応じてしてみましょう。更なる意欲づけにつながります。

教師も児童生徒の振り返りを基に、指導内容・方法の評価をし、次の授業に生かしていきましょう。（PDCAサイクルによる授業づくり）



単元（題材）ごとに導入→展開→まともをパターン化してみましょう。

各単元や題材ごとに、導入・展開・まとめの流れや活動内容をパターン化することで、児童生徒がより見通しをもちやすくなります。

（例）

- 導入（活動内容・目標の確認・読み聞かせ）
- ↓
- 展開（メインの活動）
- ↓
- まとも（振り返り、良い行動を強化する活動）



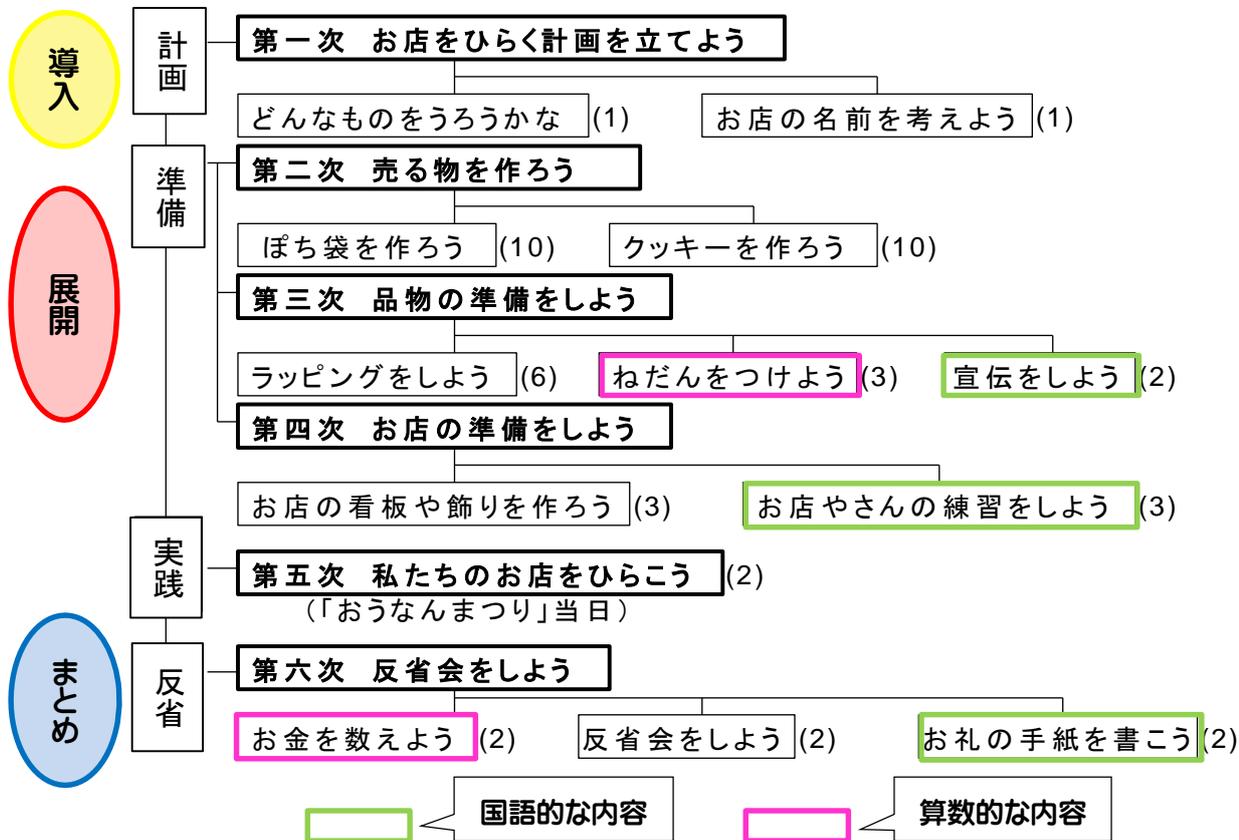
4 単元計画

1時間ごとの授業の計画を進める上で、そのもとになる単元計画の工夫が重要になります。単元によって全指導時間に違いが出るのは当然ですが、どの単元においても、単元全体の流れが導入→展開→まとめの流れになるようにするなどの工夫をしましょう。生活単元学習であれば、各教科等の内容の扱いや各行事との関連も明確にしていくことが大切です。

<生活単元学習の単元計画の例>

私たちのお店をひらこう

学習計画 (47時間扱い)



4 発問・応答・賞賛などの言葉かけの工夫

学習活動や日常生活において、失敗の経験が多くなっている児童生徒の中には、自己肯定感の低下が見られることがあります。適切な発問、応答、賞賛は、本人に自信をもたせ、自己肯定感を高めるなどの効果が期待できます。児童生徒が答えやすいような発問の仕方を工夫したり、答えや活動に対して言葉やうなずき等で教師が応答したりすることで、児童生徒の学習や活動の意欲を高めることができます。また、児童生徒は、賞賛を多く受けることで、安心して活動に取り組み、持続力も高まると思われます。児童生徒が積極的に学習や活動に参加できる言葉かけの工夫をしてみましょう。

1 発問の工夫

発問には、児童生徒の思考を深める役割とともに、次の役割があります。

- ・指示…児童生徒の活動を促す
- ・説明…児童生徒の理解を助ける
- ・助言…児童生徒のつまづきを解消する
- ・評価…児童生徒の意欲を高める

これらをバランスよく、効果的なタイミングで使いましょう。授業のどこでどの発問を使うのか、十分に教材研究をして発問計画を立てましょう。



【発問や指示のポイント】

聞いて理解することが苦手な児童生徒は、発問の意味や指示の内容を理解することが難しい場合があります。発問や指示は、下の例のように、児童生徒にとって具体的で分かりやすいものとなるよう工夫しましょう。

(例) 選択肢を用いた発問	「AとBのどちらですか？」
尊重する発問	「〇〇さん、知っていたら教えてくれる？」
具体的な指示	「線の上をはさみで切りましょう」 「左手で紙を押さえましょう」
予告する	「あと10分で始めるよ」「あと〇回で、おしまい」
尊重する指示	「～をお願いね」「〇〇さんの出番ですよ」

2 応答の工夫

少人数学習や個別学習の形態で行われることの多い特別支援学級等の授業においては、通常の学級の授業以上に、教師と児童生徒とのやりとりの密度が濃くなる人が多いです。そのため、教師の応答一つ一つが児童生徒の学習に大きな影響を及ぼします。児童生徒の思いを受け止め、児童生徒の働きかけや行動に肯定的に応答することで、学習や活動の意欲を高めることができます。

【応答のポイント】

活動に飽きてしまったり、興味のあるものに気持ちがそがれて離席してしまったりする児童生徒には、「だめ！」などの禁止用語を使わずに、「～しようね」と肯定的に伝えましょう。また、頭ごなしの応答、一方的な決め付けは禁物です。

(例) 受容する	「なるほど」「いい考えだね」「よく気がついたね」
気持ちに共感する	「そう、～なの」「～したかったのね」 「～と思ったんだよね」
優先順位を伝える	「～の続きができれば、やってみようか」 「1番目は～、2番目は～」
理由を伝える	「～だから～しようね」
見通しをもたせる	「～できれば、おしまいにするよ」 「あと2問で合格！」



3 賞賛の工夫

賞賛することは、児童生徒の、**自己肯定感**（私はこれでいいんだ）、**自信**（私はできる！もっとがんばるぞ！）、**信頼感**（私を認めてくれたこの先生、好きだなあ）を育てます。

【賞賛のポイント】

- よかった行動を具体的にほめましょう。
- 何がよかったか、具体的に伝えましょう。
- よいところを見つけたら、その時にほめましょう。
- 心をこめてほめましょう。
- 児童生徒の発達段階に応じたほめ方を工夫しましょう。

(例) ほめる	・行動のはじまり 「〇〇さん、もう気づいたね」「準備が早いね」 ・途中経過 「いいね」「がんばっているね」 「どんだんうまくなっているね」 ・達成時 「できたね」「〇〇がすごいね！」「花丸！」 「〇〇さんの発表、～がよかったよ」
認める	「順番を守れてえらいね」「待つことができたね」「その調子！」
喜ぶ	「～ができてよかったね。先生もうれしいな」
感謝する	「〇〇さんのアイデア、最高だね！ありがとう」 「進んで片付けをしてくれて、助かるなあ」

みんなの前で大げさにほめるよりも、サインやアイコンタクト等、さりげなく伝える方が有効な場合もあります。



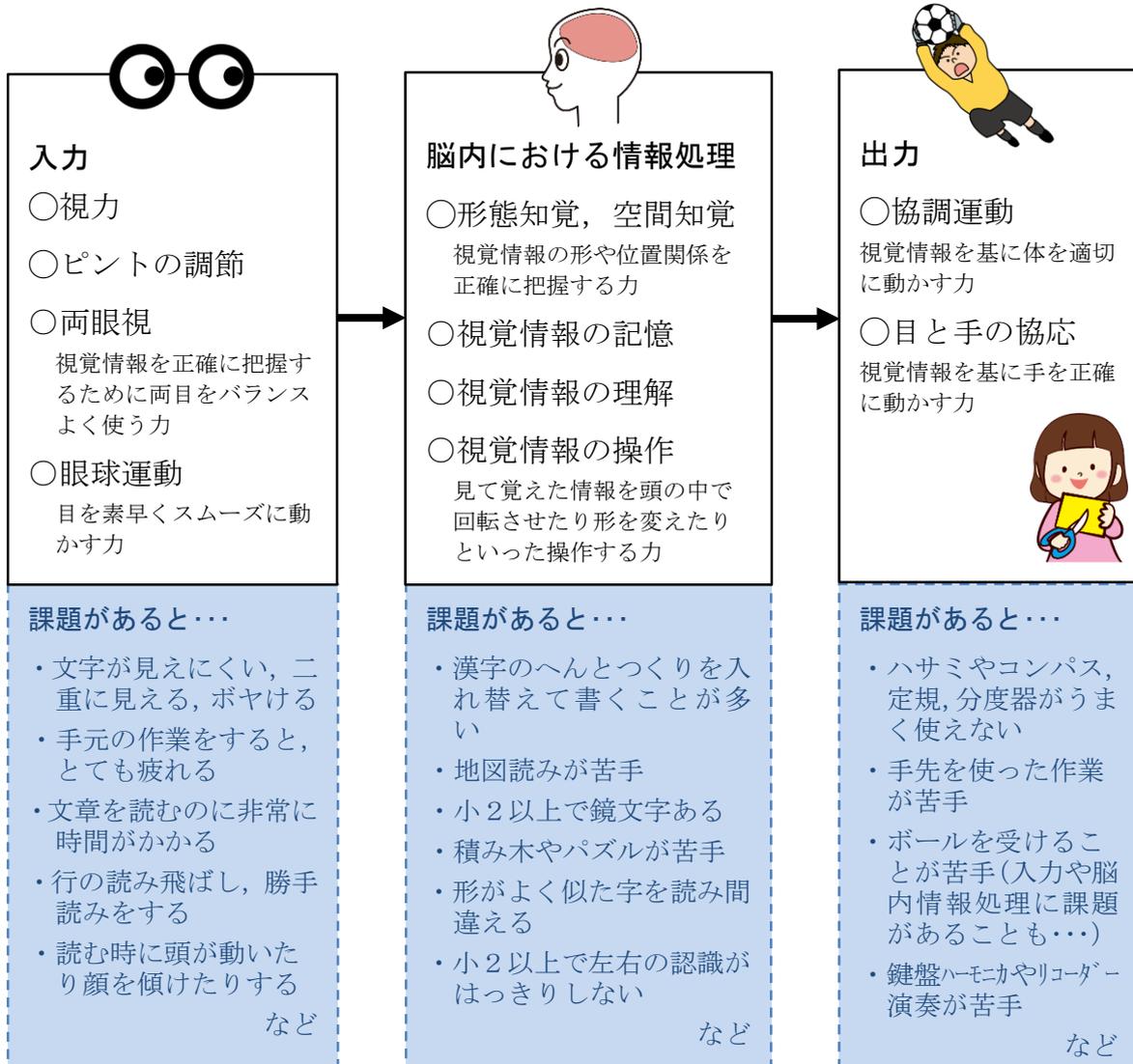
5 特性に応じた支援

特別な配慮を必要とする児童生徒は「本人の努力不足」「怠けている」「自分勝手なことをしている」と見られてしまうことがあります。これらの状態は、児童生徒の特性に起因していることがあり、その特性に応じた指導及び支援が必要です。

1 見る力（視機能）と学習



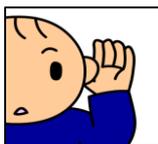
見る力とは、目で見えたもの正確に捉え（入力）、それを理解し（情報処理）、適切な行動をとる（出力）ための力です。見る力に関する機能は様々あり、視力もその一つです。視力がよくても、それ以外の機能に課題があると、それが学習のつまずきにつながる場合があります。見る力を支える代表的な機能を「入力」－「脳内における情報処理」－「出力」という一連のプロセスに沿って整理すると、以下のようになります。



視機能に関わる困難の改善には時間がかかりますが、ごく日常的な工夫や練習（ビジョントレーニング等）で楽になることがあります。気になることがあれば視機能の専門家に相談するとよいでしょう。



2 聞く力と学習



聞く力に関しては、音が「聞こえる聞こえない」ということに加えて、音の「聞こえ方」も学習に大きな影響を及ぼします。例えば、音そのものは聞こえても、様々な音の中から必要な音を聞き分けることが難しい子供もいます。ある特定の音が不快であるため、気持ちが不安定になりがちなお子様もいます。声の高低によって聞き取りやすさに影響を受ける児童生徒もいます。

本人ががんばって勉強しても、なかなか成果があがらない場合、聞く力に課題がある可能性があります。そのような場合、本人に話を聞いたり専門家の助言を受けたりしながら、聞く力の実態を丁寧に把握し、それに応じた環境調整等を行うことで、学習状況が改善されることがあります。

3 感覚過敏・鈍麻

ある特定の感覚が過度に敏感だったり（感覚過敏）、逆に過度に感じにくかったり（感覚鈍麻）するような感覚の異常は、発達障害、特に自閉症スペクトラム障害のある児童生徒で認められることが多いです。

例えばそれぞれの感覚について、次に示すような異常がある場合があります。

- 視覚では、ある視覚対象に異常にひきつけられたり（流水に見とれるなど）、光を非常にまぶしがったりすることがあります。
- 聴覚では、特定の音（機械音、突発音、乳児の泣き声、怒鳴り声など）を怖がって耳をふさぎ、騒々しい環境では必要な情報が聞き分けられず、落ち着かなくなることがあります。逆に音への反応が乏しく難聴を疑われることもあります。
- 味覚・嗅覚では、極端な偏食や特定の舌触りや匂いへの敏感さがある場合があります。
- 触覚では、特定の肌触りや服のタグを嫌う、砂場を素足で歩けない、などが見られることがあります。
- 痛覚でも過敏と鈍麻の両方が見られるが、見えないと痛みとして感じないことがあります。打撲や虫歯、中耳炎などの発見が遅れることがあります。
- 前庭覚の鈍麻があるときは、自己回転を好み、回転後眼振が出にくいことがあります。
- 暑さや寒さに敏感であるときは、温度変化に大きな影響を受けてしまうことがあります。

感覚の異常は、周囲からはなかなか理解されにくいです。そのため、感覚の異常

からくる児童生徒の行動は「怠けているだけ」「ふざけているだけ」「意志が弱くて、嫌なことから逃げてばかりいる」と思われがちです。しかし、感覚の異常を本人の頑張りでも克服しようとした場合、そこには大きな困難が伴います。そのため、不快刺激の発生源を無くす、児童生徒から遠ざけるといった環境調整をしたり、道具を使って不快刺激を防いだりすることが、感覚異常への対応の基本となります。

児童生徒のつまずきの背景に感覚の異常が関与している可能性も考慮しながら、日々の指導にあたりましょう。

<不快刺激を和らげる道具の例>



聴覚的な不快刺激を和らげるイヤーマフやノイズキャンセリングヘッドフォン



光の過敏性を和らげるアーレンレンズを使った眼鏡

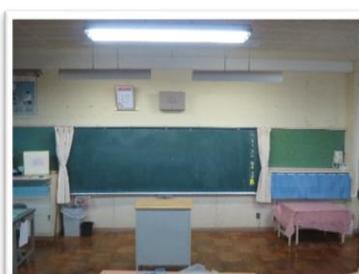
4 注意と学習

注意とは、本人がもっている様々な力を適切な場所に適切な間、振り向ける働きをいいます。注意に課題があると、本人は頑張っている授業に集中しようとしているにもかかわらず、注意を適切な場所に向けたり持続したりすることができないため、結果的に授業に集中できないといったことがあります。場合によっては、怠けている、サボっている、一生懸命やっていない、と周囲の人たちから誤解されてしまうこともあります。そうした場合、学習を密かに妨げている視覚・聴覚刺激の量を教室全体で調整したり、活動を小刻みに設定したりすることで、学習に取り組みやすくなる場合があります。

<刺激量調整の手立ての例>



カーテンで目隠しをして注意をひくものを隠す



掲示物を精選し、黒板に注意を向けやすくする



椅子の脚にテニスボールをはめて、余計な音を減らす

5 認知処理スタイルについて

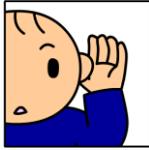
障害の有無にかかわらず、全ての児童生徒にとってそれぞれ自分に学びやすい学習のスタイルがあります。認知処理スタイルと呼ばれることもあります。視覚的な情報を活用することが得意で、物事の全体像を捉えてから学習するタイプ（視覚優位、同時処理）、聴覚的な情報を活用することが得意で、時系列的に順番に学習するタイプ（聴覚優位、継次処理）などがあげられます。

視覚優位，同時処理型指導の方法	聴覚優位，継次処理型指導の方法
<p>○全体を踏まえた教え方 指導のねらいの本質的な部分を含んでいるような課題を最初から提示する指導方法</p> <p>○全体から部分へ 複数の刺激を1つのかたまりとして最初から一度に提示し、刺激全体を捉えさせてから細部へ移行させていく指導方法</p> <p>○関連性の重視 提示された複数の刺激間の関連性に注目させる指導方法</p> <p>○視覚的・運動的の手がかり 視覚的・運動的の手がかりを用いて課題解決を図る指導方法</p> <p>○空間的・統合的 空間的な手がかりを用いたり、統合的な手法で課題解決を図ったりする指導方法</p> <p><具体的な支援方法></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 授業の流れやまとめの部分を、わかりやすく板書する。 ○ 授業中の約束や課題について、絵やカード等を書いて示す。 ○ 課題の提示にプロジェクター、実物投影機、パソコン等を使う。 ○ 問題を解く場面で、図表や矢印などの記号を活用してヒントを出す。 ○ 簡潔に短い言葉で指示をする。 ○ 指示語や抽象的な言葉は使わず、具体的にわかりやすい言葉で指示をする。 ○ 手本や見本を示し、最終的に何をどこまでやるのかを示す。 	<p>○段階的な教え方 いくつかの指導ステップを経て、指導のねらいに到達するような段階的な指導方法</p> <p>○部分から全体へ 注目させるべき刺激を、最初は部分的に提示し、徐々に全体へ広げていく指導方法</p> <p>○順序性の重視 番号等を用いながら、課題解決への順序性を重視した指導方法</p> <p>○聴覚的・言語的の手がかり 聴覚的・言語的な手がかりを用いて課題解決を図る指導方法</p> <p>○時間的・分析的 時間的な手がかりや分析的な手法を用いて課題解決を図る指導方法</p> <p><具体的な支援方法></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 板書や教科書について、重要な部分は、一緒に音読する。 ○ 図形や式、約束などについて、一つ一つ言葉で説明する。 ○ 問題を解く場面で、順序立てて考えられるようなマニュアルを用意する。 ○ 板書文字の大きさ、色、行間について全員が読みやすいように配慮する。 ○ 板書の形式を一定にする（黒板の分割や小黒板の活用）。

視覚的な支援は、わかりやすい授業や見通しをもたせるための手がかりにつながり、たいへん有効な支援方法です。しかし、場合によっては、視覚的な支援としての教材や板書、掲示物などが、集中を妨げてしまう原因となる場合もあります。児童生徒の実態をよく把握し、効果的な使い方を工夫しましょう。視覚情報が多すぎるのは禁物です。

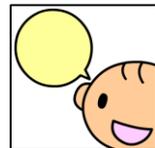


6 一人一人の苦手さに寄り添った支援



【聞く】

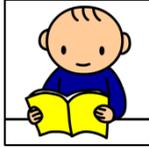
- 一番前の席や黒板の見えやすい位置など、注意がそれにくい座席の位置にする。
- 注意を向けさせてから話しかける。
 - ・話しかける前に名前を呼んだり、視線を話している方に向けたりさせる。
 - ・そばに行って小声で話しかける。
- 活動内容や指示など紙に書いて提示する。
- 文の長さや知っている言葉などに配慮して、ゆっくり、簡潔に、具体的に話す。
- 動作や絵、写真などを活用しながら、指示をしたり、説明したりする。
- 指示をした行動を終えてから、次の指示を出すようにする。
- 聞いたことを復唱させて確認する。
- 聞いたことを書く（聴写）練習をさせる。（メモを取ることにつなげていく）



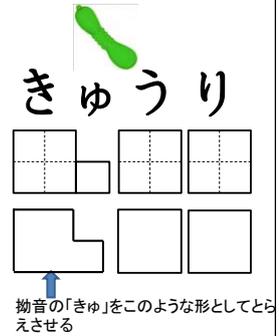
【話す】

- 子どもの話をよく聞き、よい話し方や内容の伝え方を、その都度分かりやすく伝える。
 - ・話したことをメモにして、それを整理して提示する。
 - ・声の大きさや速さ、助詞の使い方などについても必要に応じて指導する。
- 気持ちを表す言葉をいくつか提示し、その中から自分の気持ちに合う言葉を選択させ、実際に言葉にする練習をする。
- 単語カードや絵カードなどを使って、話の内容や順番を考えさせてから話をさせる。
- 話を絵や文にしたり、絵や写真を見ながら状況を説明させたりする。
- 子どもが経験した出来事を話題にして、その状況や気持ちを話すことができるようにする。
- 理解しにくい言葉の意味は、絵や図を活用させたり、身近なことに例えたりして説明する。
- 状況に関係なく話し始めた場合には、そばに行って子どもの状況を把握し、注意を促す。

【読む】



- 一度に読む量、提示する量を少なくする。
- 文に / を入れて、語と語、文節と文節を分けて提示する。
- 文字単位ではなく、その文字を含んだ単語として覚えさせる。「きゅ」→「きゅうり」
- 読む場所に視点を定める工夫をする。
 - ・行間を空けた文を用意する。
 - ・読む場所を指でなぞらせたり、定規を文に当てさせたりする。
 - ・読む場所以外を下敷きやスリットを入れた用紙で隠すようにさせる。
- 似たような形の字の違いに気づくように工夫する。
 - ・注目するところに色をつけたり、特徴を言語化したりする。
 - ・文字を拡大する。



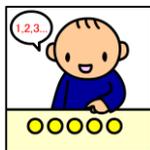
【書く】



- ノートやワークシートのマス目は、本人が書きやすい大きさにする。
- 点結びや曲線など、運筆の基本的な練習をさせる。
- 空書きするなど、身体のイメージを併用して、字形をとらえさせる。
- 漢字をへんやつくりなどにばらして、漢字の構成に着目して練習させる。
- 「はね」や「はらい」にこだわらず、書けたら認める。
- ひらがな(カタカナ)表などを下敷きなどに使用させ、困ったときに見ることができるようにしておく。
- 写真やメモなど、作文を書くときの手がかりを用意する。

筆順を教えても覚えられない子は、文字を形で理解していることがあります。字形が整っていれば評価することも必要です。

【計算する】



- 筆算の計算の中に矢印を入れて、計算の手順を示す。
- 具体物を提示しながら計算の方法を言語化する。
- 具体物・半具体物を操作しながら、視覚的に数や計算の仕方をとらえさせる。
- 位取りの桁がずれないように、枠をつけたり、縦線に色をつけたりする。
- 文章題で使われる「全部で」「合わせて」「残りは」「～より多い」などのキーワードへの注目を促し、正確な立式ができるようにする。

	1	3	2
×			2

6 教材・教具の工夫

児童生徒が自主的・主体的に学習を進め、基礎的・基本的な内容を確実に身に付けるようにするために、教材・教具を適切に活用することが大切です。

1 教材・教具の定義

教材	教育目標を達成させるために、教師が意図的にもたらすところの媒体ともいべき教育学上の素材を意味する。 文化的素材としての資料的側面が強調されたもの
教具	教育の方法または手段として使われる具体的道具を意味する。 文化的素材としての道具的側面が強調されたもの

- 一般的に教材と教具は区別されにくく、「教材・教具」と併記して用いられます。
- 活動の場、かかわる人、活用する用具等・・・すべてが教材・教具と言えます。

2 教材・教具の役割

○ 自発的な行動の促し

児童生徒の興味・関心を引く教材・教具は、児童生徒の自発的な行動を自然に起こしやすくします。

○ 学習への動機づけ

児童生徒に何らかの学習のきっかけを作ること、取りかかりの動機づけが重要です。

○ 系統的な学習の展開

児童生徒の発達の段階に合わせて、系統的な学習を進めるために様々な工夫が必要です。

○ 学習効率の向上

実態に合った教材・教具が準備され、適切な指導が行えると、児童生徒の学習効率が上がります。

【教材・教具を作成するときのポイント】

- 児童生徒の障害の状態及び能力、特性に応じて工夫します。
- 一人一人の発達段階と指導目標や学習課題に合わせて工夫します。
 - ① 発達段階に合ったもの
 - ② 「できた」という成就感があり、またやってみたいと思うようなもの
 - ③ 結果が分かりやすく、確認しやすいもの
 - ④ 興味・関心をひくもの
 - ⑤ 使用しても壊れにくいもの（ラミネートをしておくなど）
 - ⑥ 安全に使用できるもの

市販されているものもありますが、教材カタログや特別支援学校の教材なども参考にしながら、実態に応じた手づくり教材・教具を作成し、活用していくことが必要な場合もあります。授業の目標を常に念頭におき、効果的に活用していくことが重要です。



【教材・教具の工夫・作成の観点】

- ①注意を引きつけ、活動を引き出すこと
- ②正しい反応を強化できるものであること
- ③個のニーズに合ったものであること
- ④身近生活の処理能力の伸長を促すこと
- ⑤集団生活への参加を促すこと
- ⑥生活経験の拡大を図ること
- ⑦事柄を数量的、合理的に処理する力を養うこと
- ⑧感受性を高め、表現力を伸長すること
- ⑨ことばの発達や弁別、形態把握の力の向上を促すこと
- ⑩健康の増進を図ること
- ⑪感覚、運動機能の発達を促すこと など



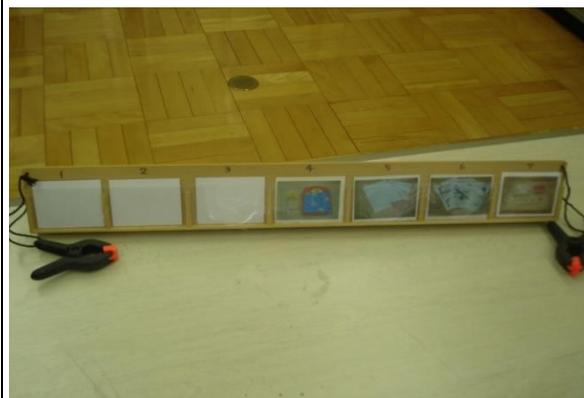
児童生徒一人一人の顔を思い浮かべ、教材・教具を工夫、作成していきましょう。授業の流れをイメージし、教材・教具の効果的な活用について考え、児童生徒の反応を予想します。このような入念な準備は、授業者自身が授業を楽しむことにもつながります。そんな授業を毎回行っていきたいものです。



3 教材・教具の具体例

学習への見通し	学習予定カード、タイマー、手順カードなど
学習全般	具体物、写真、絵カード、紙芝居、ワークシート、フラッシュカード、スリット付きカード、50音表、ひらがなチップ、なぞり書きカード、筆順カード、読みがなつき教科書、マス目付きノート、筆算手順カード、ボウリング、百玉そろばん、発表カード、縫いさし、ペグさし、ひも通し、折り紙、パソコンなど
コミュニケーション	意思表示カード、表情カード、ソーシャルスキルトレーニング・カードなど
発音指導	鏡、ストロー、かるた、吹きだし、ペープサートなど

4 教材・教具の紹介



<学習課題予定板>

個別の課題学習において、その学習時間に行う課題を写真に撮り、差し込み式で示したスケジュールボードです。洗濯ばさみの部分を机の前方に取り付けて固定することにより、子どもが見やすく、また、教材等を机から落とすことも防ぎます。1つの課題が終わると裏返しにして、次の課題を行います。課題の難易度のバランスを考え、順番を工夫して入れることで、教師一人で3～4人の子どもを指導していくことができます。



<絵と文字のマッチング>

絵と文字を合わせて、クリップでとめていく課題です。どれだけやると終わりなのか、見通しがもちやすく、また、クリップでとめるという工程が意欲を高めるようです。少ない数から練習し、ある程度定着すると、一人でも学習を進められるようになります。



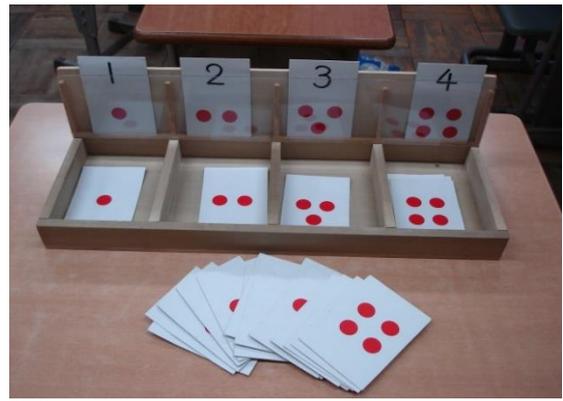
<数（1～3）の学習>

1～3の数字を見て、その数の分だけ、物を入れていく課題です。これは、赤いストローを切った物を使っています。まずは、袋に赤いシールを貼ったものから練習し、徐々に数字だけで、できるようにしていきます。この課題も慣れてくると一人で進めていくことができます。



<ネジの締めはずし>

比較的、重度の障害のある児童生徒でも取り組むことができます。大小様々あるネジとナットの大きさを区別し、締めたり、はずしたりしていきます。指先の巧緻性や集中力の向上にもつながります。最初は同じサイズのもので練習するとよいでしょう。



<カードの弁別>

これは、数字カード（ドット入り）の弁別課題です。差し込み式の弁別板を1つ作っておけば、使うカードを変えることで、様々な弁別学習ができます。数字のみ、ドットのみ、文字、形、色・・・見分ける力をつけていくことは、学習を広げたり、深めたりしていく上でもとても大切です。



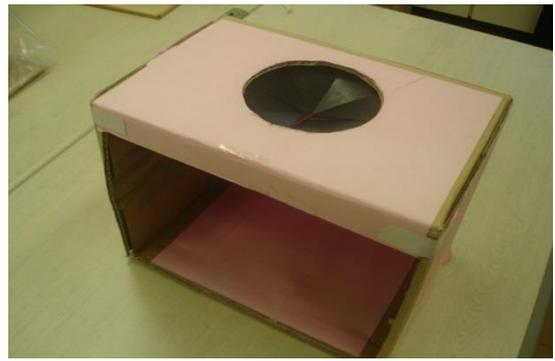
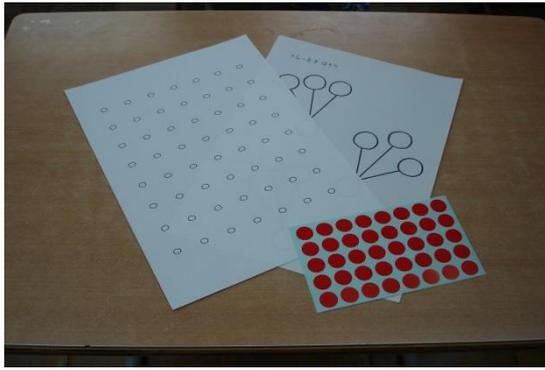
<ひも結びの練習>

最近、マジックテープの靴やかぶりのエプロン等もあり、ひもを結ぶ場面が減ってしまいました。蝶結びができるよう毎日練習をしていくといいですね。太めのひもで色を分けるとわかりやすいです。徐々に同じ色で細くしていきます。板に自分の名前を書いておき、毎日行うといいでしょう。



<スタンプ押し>

スタンプを枠の中に押していく課題です。作業所等でも袋にスタンプを押す作業がありますね。その都度、スタンプ台を使ってインクをつけ、丁寧にはっきりと1度だけ押すという作業は、なかなか難しく、練習が必要です。



<シール貼り>

印に合わせてシールを貼ります。お店に行くと、大小様々なシールがありますので、児童生徒の実態に合わせて選ぶといいでしょう。一番小さいシールでは、大人でもかなりの集中力を要します。児童生徒はシールが好きなので、あまり嫌がらず取り組むことができます。

<さわってあてよう>

ダンボール箱の1面を丸く切り取り、黒いゴムシートに切れ目を入れて取り付けたものです。手を入れて、中にあるものをさわってあてる・・・レクリエーションで行うと盛り上がります。

100円ショップやホームセンターにも教材に利用できるものがたくさんあります。ちょっとした工夫で一人一人にあった教材・教具が作成できます。



<参考・引用文献>

○「特別支援教育の授業づくり 46のポイント」. 太田正己著. 梁明書房 (2006)

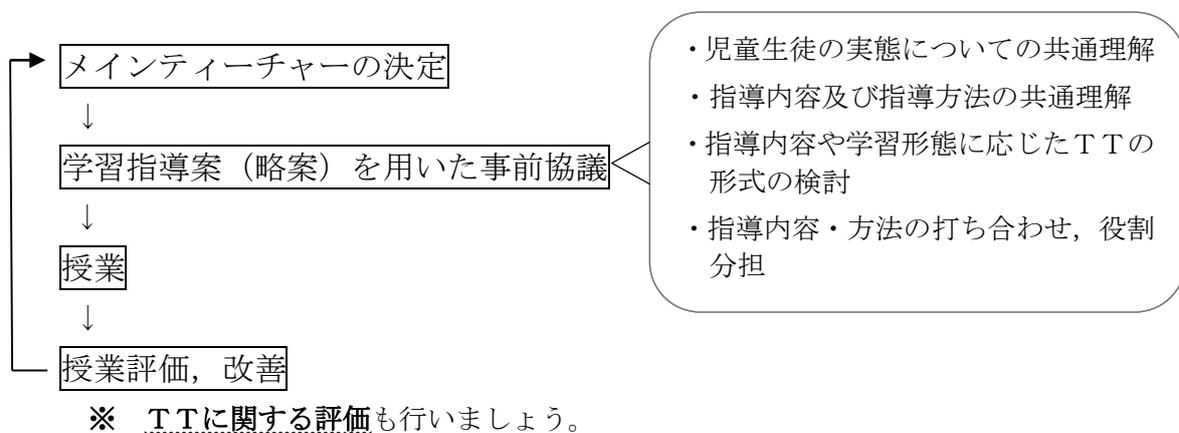
7 ティーム・ティーチング

ティーム・ティーチング（TT）とは、複数の教師が役割を分担し、協力し合いながら教育計画をたて、実践指導する方式のことです。

ティーム・ティーチングによる授業では、事前と事後に次のことを行いながら進めていくことが重要です。

- ①ティーム全員で、題材・単元の指導計画を検討する。
- ②指導計画に基づいて、共同で教材・教具を作成する。
- ③題材・単元等の終了後、指導の評価について共に協議し、反省する。

1 ティーム・ティーチングの実施手順



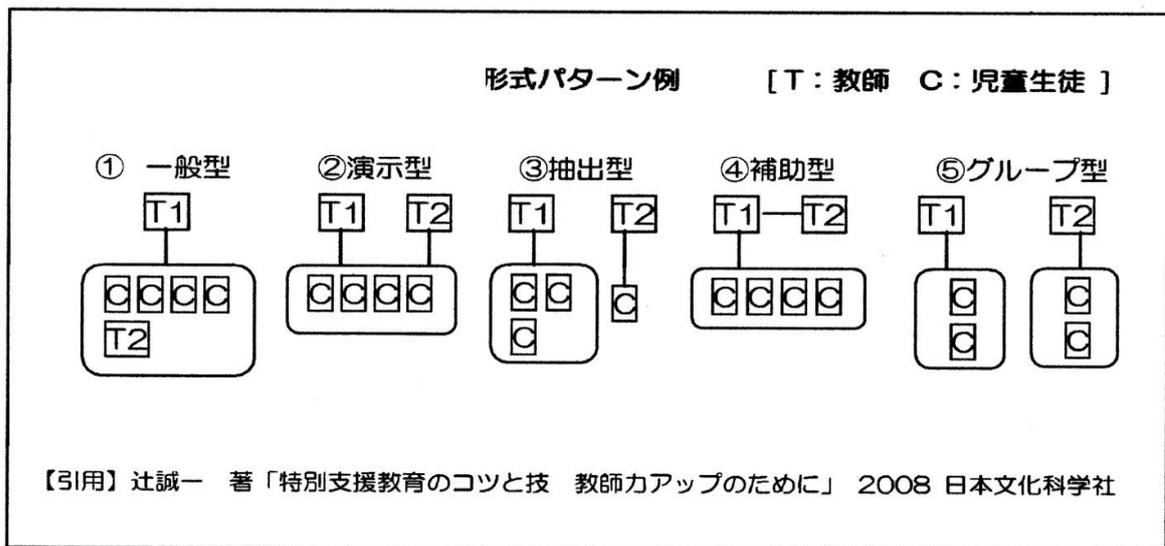
【ティーム・ティーチングのメリット】

- 児童生徒の実態把握を、多くの視点から行うことができます。
- 個々の教師の専門性や特性を生かし、創造的な授業を実施することができます。
- 学習グループを多様に編成でき、個々の能力や特性に応じた指導が可能になります。
- 一斉指導において、特別な支援を必要とする児童生徒へ個別の対応ができます。
- それぞれの教師が分担して教材・教具を準備することができます。
- 学習内容によっては、教師の特技を生かしたり、学級合同での活気あるダイナミックな授業を行ったりすることができます。
- 互いの発想・方法が刺激となり実践が高められます。



3 ティーム・ティーチングの例

- 学級内の授業の中で・・・
 - ・ 課題の異なる児童生徒を分担して指導する。
 - ・ 特に配慮の必要な児童生徒を重点的にサブとなる指導者が担当する。 など
- 交流学級や特別支援学級合同での授業の中で・・・
 - ・ メインとなる指導者が全体の指導，サブとなる指導者が個別の言葉かけをする。
 - ・ 児童生徒を小集団に分け，それぞれの集団を担当する。 など



これらは、学習形態の基本的なモデルです。実際の授業では、児童生徒の目標や支援のニーズ，対応できる教師の数，学習スペースなどによって多様な形態が考えられます。また，授業時間内にこれらの学習形態をいくつか組み合わせていくこともあります。目標や課題に応じて学習形態の組み合わせも様々に工夫することが重要です。

TTのメリットを意識して，日々の授業を効果的に改善していきましょう。

ティーム・ティーチングによる授業では，児童生徒の指導に関する共通理解や役割分担をしっかりと行い，その場限りの対応や児童生徒の補助や管理に終始しないように気をつけましょう。また，メインとなる指導者に任せっきりにするのではなく，全員で授業をつくっていくという意識をもつことが重要です。担当の児童生徒の指導にあたりながら，授業全体を見ていく視点が大切です。



<参考>

「特殊教育諸学校におけるティーム・ティーチングの在り方」(2000)

茨城県教育研修センター 研究報告書第41号より

特別支援学校におけるティーム・ティーチングの指導・支援の技術・スキル(事例)

技術	スキル	具体的な事例 MT(メインティーチャー) ST(サブティーチャー)
	場の構成	機材の操作
教材提示		<ul style="list-style-type: none"> ・学習の流れに沿ったスムーズな視覚教材等の提示 ・急に必要になった教材の準備・提示
教材の設置		<ul style="list-style-type: none"> ・体育や図工等の時間に導入の説明と並行して教材・教具を準備する。
効果づくり		<ul style="list-style-type: none"> ・音響機器やピアノによる雰囲気づくりをする。 ・照明のコントロール
意欲誘導	活動の先導	<ul style="list-style-type: none"> ・歌を歌えるように先に歌う。 ・活動課題を例示する目的で先にやる。(サーキットトレーニング) ・答えに戸惑う子どもへ例示する意図で発言する。
	雰囲気の盛り上げ	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒役になり、間違っただけで答えたりしながら活発な意見交換を促す。 ・授業に消極的になりがちな生徒に付き添い、一緒に活動することで心を解きほぐす。 ・子どものようにリアクションをとって盛り上げる。 ・読み聞かせの時など合いの手を入れる。
	発言を促す	<ul style="list-style-type: none"> ・ちょっとしたきっかけがあれば発言・発表ができる子どもに言葉かけをする。 ・意見を引き出すような言葉かけとして、「一緒に考えてみよう」等の発言をする。
	活動を促す	<ul style="list-style-type: none"> ・「やってみよう」「面白そう」などの言葉かけをする。 ・活動の流れにのれない子どもに、興味を引き出したり、一緒に参加するよう働きかけたりする。
	課題への意識づけ	<ul style="list-style-type: none"> ・活動から気持ちが離れた子どもに意欲を高める言葉かけをする。 ・教材提示に時間がかかるときなど、期待感を膨らませるような発言をする。
	学習への意欲づけ	<ul style="list-style-type: none"> ・離席した子どもを授業に向くよう対応する。 ・情緒的に不安定な子どもへ情緒の安定を図り、課題へ向かわせようとスキンシップや言葉かけによって、子どもの気持ちに寄り添って支援する。 ・しかられて落ち込んでいる子へ意欲付けを図る。 ・教師との関係がこじれ、活動が止まったときに、対応者が代わることによって子どもがスムーズに活動に参加できるようにする。 ・学習の導入で、寸劇など行い興味・関心を引き出す。

理解援助	補足説明	<ul style="list-style-type: none"> ・授業で、MTの説明では、その子にとって分かりづらかった時に、S Tが補足して説明をすることで、子どもが活動内容を理解できるようにする。 ・子どもの反応が今ひとつの時、子どもの代弁者としてMTの補足説明を求める質問などする。 ・MTの難しいことばを分かりやすく説明する。 ・MTにかわって全体へ美術や体育などの専門分野の補足説明をする。 ・発問の意味が分からない子どもに、分かりやすく伝える。 ・MTの発言を繰り返し理解の徹底を図る。
	演示	<ul style="list-style-type: none"> ・MTが説明をし、S Tが分かりやすく手本の実技をする。 ・良い例、悪い例を演じて見せ、子ども達に具体的に考えさせる場面を作る。 ・手本となるよう歌を歌ったり、楽器を演奏したりする。 ・教師と子ども役を演じ、子どもの発言、発表の仕方を分かりやすく教える。 ・挨拶などソーシャルスキルの手本を例示する。
	ヒント	<ul style="list-style-type: none"> ・MTの「海について知っていること？」に対し、他の教師が波の動作をしたり、ザザーと音を発したりして「波」ということばを引きだす支援をする。 ・問いかけに対して子どもの反応があまりないとき、S Tがヒントとして一つの答えを提示する。 ・誤答を例示することによって子どもへゆさぶりをかけ理解を深める。
	視覚化	<ul style="list-style-type: none"> ・MTが説明したことを板書し、視覚的な補助をする。 ・大きな集団で話を聞くととき、話のキーワードを文字で提示し理解を助ける。 ・絵を描くなど分かりやすい方法で支援する。 ・必要に応じS Tが絵・写真カードを提示して理解を助ける。
活動の補助	発言（意思表示）のフォロー	<ul style="list-style-type: none"> ・うまく気持ちを表現できない子どもの気持ちを、「たのしかったよー」等と代弁する。 ・重度の子どもの僅かな動きから意思を読みとりMTに返す。 ・会話が困難な子どもに代わって会話や返事をする。 ・表現が苦手な子どもに代わって発表する。
	活動の補助	<ul style="list-style-type: none"> ・走るコースがわからないとき伴走する。 ・一緒に鬼ごっこをして逃げることを教える。 ・トランプを持ってあげゲームを一緒にやる。 ・子どもが少ないとできない野球やバレーボールの時にゲームに入る。楽器の演奏で手を添えて一緒にやる。 ・大玉乗りやトランポリン、シーツのブランコ等人数が必要となる活動を補助する。 ・プールでの活動や体育での活動を一緒に取り組む。
	技能面の補助	<ul style="list-style-type: none"> ・ミシンの操作、はさみの操作の時に補助する。 ・調理時のガス器具の操作や包丁の介助をする。 ・マヒのある子どものノートの固定やページめくりを介助する。 ・筆記の際に手を添えて介助する。 ・衣服の着脱の際、手先が動かない子どものボタンかけを介助する。

	姿勢の保持・介助	<ul style="list-style-type: none"> ・学習時のポジショニング作りや粗大運動などの一人では難しい活動の補助をする。 ・車椅子の乗り降りの補助をする。 ・体の向き，教材との距離などの介助をする。
指導の分担	グループの指導	<ul style="list-style-type: none"> ・目標に合わせたグループをつくり指導を担当する。 ・実態に合わせ，課題を変えて数人の指導を分担する。 ・活動の中で班を編制し指導を担当する。
	個別の指導	<ul style="list-style-type: none"> ・教科指導で，子どもが課題につまずいた時それぞれの子どもに適切な個別支援を行う。 ・集団内の個人差（個別目標）に合わせて指導にあたる。 ・一斉指導ではついていけない子どもに付いて個別の支援をする。
	違う課題の指導	<ul style="list-style-type: none"> ・活動にのれない子に，その子の興味に合わせて個別に指導する。 ・多動な子等集団に適応できず同じ活動ができない子どもについて，場所を変えたりしながら指導にあたる。 ・体調のため活動が制限されるなど一斉活動ができない子どもの課題を容易にして共に学習できるよう対応する。
	場面の担当	<ul style="list-style-type: none"> ・歌，合奏，ダンス等の分野，ボール，器械体操等の分野，木工，農作業等の分野と教師の得意分野の場面を分担する。 ・学習の途中でS Tが全体指導を引き受け，MTがグループや個別の指導を行う。 ・しかり役，なだめ役を分担する。
評価・賞賛	評価	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽や体育など，大集団での活動の評価を分担し，細かく多面的に見る。 ・授業中，ほとんど発言しなかった子どもが，内容をどれだけ把握しているかS Tが個別に対応して理解度をチェックする。
	賞賛	<ul style="list-style-type: none"> ・MTの賞賛を受け，より賞賛が効果的になるようS Tが拍手や言葉かけをする。 ・S Tが身近な子どもに細かな励ましや賞賛をする。
	公平性	<ul style="list-style-type: none"> ・賞賛・叱責がMTの主観的になるのを防ぐ。 ・MTが気づかなかった発言や行動を適性に評価し取り上げる。
	即時性	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ずつ細かなワークノートの指導やその場での採点などをする。 ・注意すべき子どもを取り出してその場でその時に指導する。
臨時的対応	パニックへの対応	<ul style="list-style-type: none"> ・パニックを起こした子どもに対応し，他傷や自傷行為を防ぐ。 ・パニックを起こした子どもを室外へ連れ出す等混乱を避ける。
	情緒の安定	<ul style="list-style-type: none"> ・情緒が不安定になった子どもを落ち着くよう指導のため席や教室から落ち着ける場所へ一時的な移動の補助を行う。 ・授業が始まっている教室に入れられない子どもへ対応する。
	集団逸脱への対応	<ul style="list-style-type: none"> ・予想しなかった子どもが突然，集団行動から逸脱した時に臨機応変な対応をする。 ・活動の場から離れてしまった子どもへ対応する。 ・移動中に座り込んで動かなくなった子どもに対応する。
	治療等	<ul style="list-style-type: none"> ・怪我人や急病者を保健室へ引率する。 ・具合が悪くなった子どもに対応する。（看護，家庭との連絡他） ・発作を起こした子どもへの対応（看護，養護教諭への連絡他）
	排泄指導	<ul style="list-style-type: none"> ・トイレへの引率，介助 ・トイレの失敗の処理

健康・安全	健康面の配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・体調がいつもと違うとき、個別に対応する。 ・体調を常に観察し、必要に応じて対応にあたる。 ・気温の変化などに注意し、体温調節を補助する。 ・照明の調節など学習環境の調節をする。
	事故の防止	<ul style="list-style-type: none"> ・サーキットトレーニングの時など要所に待機して安全に気を配る。 ・移動時の子どもの把握など、危険の回避を図る。 ・理科の実験，調理，作業など危険を伴うとき事故防止に配慮したきめの細かい指導を行う。 ・日常的な活動の中でも電気製品を使うときは感電事故などに気配りをする。
MTのサポート	MTのアシスト	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数や重度のため発言が少ない時，子ども役となって授業を構成する。 ・学習態度作りのための見本を示したり，MTに代わって授業の流れを止めずに注意したりする。 ・子どもが困難な部分，原因をMTに伝え，授業の流れを修正する。 ・MTの発言に頷いたり，返事をして授業の流れを助けたりする。 ・子どもの予想もしない発言に戸惑ったりするMTをカバーして代わりに答えたりする。 ・複数の子どもからの問いかけに分担して答える。
事前事後	共通理解	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの実態，授業のねらい等を共通理解する。 ・指導の分担や授業の流れを確認する。 ・予想されるトラブルへの対応法を検討する。
	授業案づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろなアイディアを出し合う。 ・展開についていろいろな案を出し合い内容を深める。 ・指導の計画を協力して作る。
	教材準備	<ul style="list-style-type: none"> ・協力し合って大がかりな教材を準備する。 ・分担することによって幅広い教材を準備する。
	授業後の整理	<ul style="list-style-type: none"> ・教材等の片づけを分担する。 ・授業や子どもの様子などの記録を分担する。
その他	授業の評価 (教師)	<ul style="list-style-type: none"> ・トラブルへの対応策などについて相談し合う。 ・指導の方法を学び合う。 ・授業の反省を話し合いによって客観的に行う。
	授業の評価 (子ども)	<ul style="list-style-type: none"> ・観察した様子，評価等の情報を交換する。 ・子どもの見方等いろいろな考えを出し合って実態把握を深める。
	学級経営の分担	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者への対応を分担する。 ・MTと連携をとりながら多角的に保護者へアドバイスをする。 ・生徒の悩みを聞くなど生徒指導上の仕事を分担する。 ・教師間で，悩みに対して助言，アドバイスをする。

※上記の具体的事例はアンケートを基に具体的な内容を整理したものである。

8 評価の工夫

授業を実施した際は、その都度、評価を行い、指導内容や方法を改善し、より効果的な指導を行うことが必要です。PDCAサイクルによる授業づくりを進めていくために、評価の際は、児童生徒の姿を評価するとともに、目標等の妥当性など、教師の指導についても十分に評価していくことが重要です。

1 教師が1時間の授業で行う「授業評価チェック表」

あれもこれも…と欲張らずに「この授業ではここを押さえない」というポイントを2～3点に絞り、目標が達成されていれば次の内容を提示し、数回やっても達成できない内容は、支援方法を変えたり、目標の再検討をしたりする必要があります。

1時間ごとの授業内容が、本当にその児童生徒の課題に沿っているのか、目標設定は妥当であったか、指導内容や方法、教材・教具は適切であったか、個に応じた有効な手立てであったか等、教師自身の指導に関する評価も十分に行い、授業を見直し、改善することを通して、よりよい授業づくりを目指していきましょう。

2 児童生徒が1時間の授業で行う「自己評価表」

この時間で何を学習したのか、何ができるようになったのか、次の時間には何を目標にしたらいいのか、を児童生徒が明確に把握できるような自己評価表を用意しましょう。

文字を書くのが苦手な児童生徒には、写真や図を切って貼ったり、簡単にチェックしたり、また自分の気持ちを表情カードやマークで表したりする工夫も必要です。



3 児童生徒が活動の後などに行う「他者評価・相互評価」

複数で活動をした後には、他者から良かった点や改善点等をあげて評価してもらうことで、自分では気付かなかった自分自身のよさや課題を知り、意欲の向上にもつながります。また、友だちを評価することで、友だちのよさや課題を自分の学習に生かし、よりよい取り組みが引き出されます。

4 継続的な評価にするために

評価は、積み重ねることが大切になります。そのためには、継続できる評価表の作成が必須です。評価をすることが負担にならないように、ポイントを絞って、簡単にチェックできるものを作成しましょう。

また、教師も児童生徒も、評価表を次の授業につなげられるように心がけましょう。教師は次の授業内容の検討材料に、児童生徒は次の授業の目標設定の材料にできるとよいでしょう。

5 評価について

- どの程度できればよいのか、可能であれば数値で示しましょう
 - ・持続時間（その課題，行動が持続している時間）
 - ・潜時（5秒以内，2分以内…）
 - ・頻度（5回中4回…）
 - ・割合（8割以上，90%…）
 - ・継続回数（5回以上…）
 - ・距離や歩数（5m以上，10歩以上…）
- 何によって評価するかを明確にしておきましょう
 - ・ノート
 - ・ワークシート
 - ・発表
 - ・作品
 - ・取り組みの様子…

【チェックポイント！「あいまいな表現はNG」】

（例）

- × 「集中して漢字を書くことができたか」
- 「漢字練習帳に1ページ分，漢字を書くことができたか」
- × 「音読にしっかりと取り組むことができたか」
- 「3分間，声に出して本を読むことができたか」
- × 「頑張って」「きちんと」「ていねいに」「落ち着いて」
→評価する人によって基準が違うので不適切！

違う評価者でも同じ評価になるように！

児童生徒に合わせて基準を変えること→目標，評価のオーダーメイドが必要
(☞授業づくり編 2-①「実態把握，目標設定の工夫」参照)

本時の評価 「○○を理解することができたか」

このような評価基準をよく見かけますね。「理解する」とは，どのような状態をいうのでしょうか？「理解したかどうか」をどのように見取るのか，基準が曖昧となってしまいます。適切な評価規準を設定し，達成できたかどうかを把握していかなければ，次の目標設定も曖昧となってしまいます。例えば・・・

- ・「○○をワークシートに書くことができたか」
- ・「○○について，発表することができたか」
- ・「手順表を見て，最後まで一人で作成することができたか」・・・

このように，理解した結果，何をすることができればよいかを行動の用語で具体的に記述することにより，確かな評価ができ，次の目標設定に確実につながっていきます。



<教師が1時間の授業で行う「授業評価チェック表」(例)>

事項	評価の視点
実態把握	個々の障害の状態及び発達段階や特性等を的確に把握している。
	個々の経験や単元(題材)に関する興味・関心を的確に把握している。
目標設定	個々の実態を踏まえた目標を設定している。
	評価しやすい具体的な目標を設定している。
	生活の充実につながっている。
学習過程	個々の目標を達成するために適切な手立てを講じている。
	個々の実態に応じた適切な教材・教具や補助教材等を活用している。
	指導内容や方法は、個に応じた適切なものである。
	学習活動の展開(導入・展開・まとめ)や時間配分を適切に設定している。
	個々の実態に応じた適切な活動量を確保している。
	メインティーチャー、サブティーチャーの役割分担を明確にしている。
評価	本時の目標を達成している。
	個々の目標を達成している。
	個々の実態、目標、学習活動、評価は一貫性がある。

<児童生徒が1時間の授業で行う「自己評価表」(例)>

ふりかえりカード	
氏名 <input type="text"/>	
<期日> 月 日 ()	
<今日の活動(何をしましたか?)>	
1	じぶん すず かつどう 自分から進んで活動できましたか?
2	たの かつどう 楽しく活動できましたか?
3	じぶん は 自分のやくわりを きちんと果たせましたか?
4	あたろ じょうず 新しくわかったことや上手にできたことが ありましたか?
5	ともだち きょうりょく 友達と協力して活動できましたか?
◎とてもよくできた ○まあまあできた △あまりできなかった	
<友だちやのよかったところ>	
<感想・反省>	
	

